

村上市上野遺跡第8次調査の出土土器について

—自然流路SR103の出土土器を中心に—

加藤 学・加藤 元康

はじめに

新潟県村上市猿沢・檜原に所在する上野遺跡は、縄文時代後期前葉の大規模集落である。三面川の支流である高根川右岸に立地し、標高は約35～39mで、花崗岩を主体とする西側の山地からの土砂流等によつて形成された扇状地にある。SR103は、遺構密度が高い範囲を南北方向に流れる自然流路である。本研修報告では、SR103のうち、廃棄による埋め戻しで一括性があり、砂層を介在しながら重層的な堆積状況を把握することができた27G～30Iグリッドの土器を対象とした。

自然流路SR103

27G～30Iグリッドの自然流路SR103では、遺構上面で平地建物の柱穴や石囲炉を検出し、柱穴の底には柱荷重により湾曲して割れた土器片も出土した。このことから、流路は集落造営中に埋まり切ったと考えられた。また、自然流路のセクション（第1図）では、廃棄によって埋め戻された堆積物間に挟在する砂層を検出し、土砂流等の増水時に一時的に流れ込んできたものと考えられた。この砂層を指標に遺物の廃棄単位を1層から7層まで設定し、層別の遺物の取上げを行った。現地では、2層に南三十稻場式土器、3層以下で三十稻場式土器新段階が出土する傾向が見受けられた（第2図）。

研修計画と調査

本流路では土器型式による年代的な基準を設定できること、他地域の土器型式に関する情報が得られることが想定されたため、隣県を含めた後期前葉の土器について2か年の調査を計画した。1年目は、三十稻場式土器段階を中心に、福島県・山形県で調査を実施した。実施日は令和6年12月17日～19日である。

調査した遺跡は山形県花沢A遺跡、福島県越田和遺跡・獅子内遺跡・高木遺跡である。花沢A遺跡では土坑（DY3）から出土した一括遺物、福島県越田和遺跡・獅子内遺跡・高木遺跡では綱取I・II式土器を中心に三十稻場式土器についても調査した。この他、大木10式や三十稻場式土器を中心に村上市アチヤ平遺跡の資料も観察した。

小結

現段階における所見を記載する。最下層で出土した土器（第2図15）は綱取I式土器である。口縁無文帶直下の隆線の上下に沈線を施しており、「最も新しい段階（綱取Ib式新）になると口縁直下を巡る隆線のすぐ下に沿って沈線が施されるようになり、隆線も低くなる」（志賀1990）という指摘から綱取I式でも新しい段階に位置づけられる。同一の層から三十稻場式土器新段階の土器（第2図14）が出土しており、両者は共存すると考えられる。また3層から出土した波頂部に弧状の沈線を連続して施した鉢形土器の破片（第2図5）は注口付鉢形土器で、三十稻場式土器新段階の土器である。この土器と類似する土器は米沢市花沢A遺跡の土坑（DY3）から出土しており、口縁部の頸部直下に注口が付くいわゆる「千鳥窪類型」（鈴木1992）に類する土器と共に伴している。堀之内1式並行と考えられ、本遺跡の三十稻場式土器新段階は綱取I式新段階と堀之内1式に並行すると想定できる。

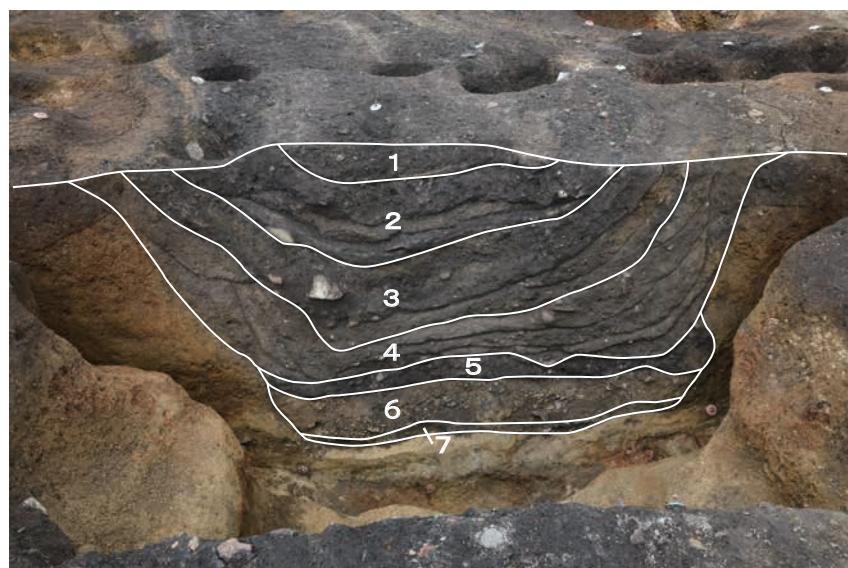
本遺跡の自然流路SR103の出土土器については接合作業が未実施のため、今後、整理作業を進めなが

ら検討する予定である。

引用・参考文献

志賀敏行 1990 「綱取 I 式土器論序説」『史峰』第 15 号、新進考古学同人会、pp.26-35

鈴木徳雄 1992 「縄文後期注口土器の成立」『縄文時代』第 3 号、縄文時代文化研究会、pp.63-94



第 1 図 SR103 のセクション (27H グリッド)



第 2 図 SR103 における土器の層位的出土